

トマス・モア生誕500年記念とソヴェトのモア研究

田村秀夫*

『ユートピア』の著者トマス・モア生誕の年は、父ジョン・モアの残したメモにより、「国王エドワード4世治世の第17年、聖母マリアのおきよめの祝日〔2月2日のキャンドルマス〕のあとの第1金曜日、2月7日」ということまでは確認できる。だが、2月7日が金曜日なのは1477年であり、エドワード4世の治世第17年は1478年である。そこでモアの生誕の年について、1477年説と78年説とが可能となる。国際トマス・モア協会の事務局長で機関誌『モレアーナ』の編集長であるマルバドゥールは、「500年記念祭を前にしても、生年は大した問題ではない。エラスムスの生年も確定されなかったから、世界は4年間にわたって（1966—69）彼の500年祭を祝った。彼のロンドンの友人の記念祭が2年にわたることを喜ぶべきではなかろうか」¹⁾と述べており、1977年から78年にかけて世界各地でモア生誕500年記念の行事が催された。

1977年2月8日にイリノイ大学で500年記念祭が行なわれたのを皮切りに²⁾、10日と11日にはニューヨーク市のフォーダム大学で《500年記念コンファレンス》が開催され、その内容は同大学の機関誌『思想』の記念号³⁾に発表された。4月には12日から17日まで6日間にわたる国際会議が、国際トマス・モア協会とドイツのトマス・モールス・アカデミーの主催により、フランスのアンジェーで開かれ⁴⁾、秋になると、9月5日から10月14日までロンドンのギルドホール図書館で展示会が開催され、11月23日にブリュッセル自由大学のルネサンス研究所が記念シンポジウムを行なった。さらに11月25日から翌78年3月12日にかけて、ロンドンのナショナル・ポートレイト・ギャラリーで画期的なモア展《王のよきしもべ、サー・トマス・モア、1477/8—1535》が開かれ、記念講演や出版も行なわれた⁵⁾。

1978年になると、このモア展と並行して、2月にはオーストラリアのメルボルンとシドニーで記念祭や講演会が行なわれ、3月23—26日にはシドニーのマックワリー大学で開催された歴史家会議でモアが扱われたほか、8月まで各地で記念の催しがあった。またニュージーランドでもシンポジウムや講演会が行なわれた。

ヨーロッパでは、アイルランドのダブリンで5月24日から4日間にわたり記念シンポジウムが開かれたほか、ポルトガルでも記念講演その他が行なわれた。さらに、ア

* たむら ひでお 中央大学経済学部

アメリカ合衆国で記念行事が行なわれたが、そのうちでも重要なものは、ワシントンのジョージタウン大学で開かれた国際会議《トマス・モア——その人と時代》であり、英・独・仏からの報告者も加わって、6月22日から4日間にわたって行なわれた⁸⁾。

わが国での記念行事は、まず、日本トマス・モア協会が1977年の夏45日間にわたってイギリスとベルギーにおけるモアの跡を訪ねる《トマス・モア巡礼》を行ない、英・仏のモア研究者⁷⁾との交流を深めた。それは1977年2月と1978年2月のちょうど中間の時期であり、モアの生年についていわば「折衷説」⁹⁾をとる結果となった。また、日本トマス・モア協会は『トマス・モアとその時代』⁹⁾の記念出版も行ない、78年にはその他にも記念の出版物¹⁰⁾が刊行された。さらに、社会思想史学会は、1977年10月の中央大学における大会で、シンポジウム《ユートピアの成立》を行ない¹¹⁾、年報『社会思想史研究』創刊号が〈研究展望〉としてモアを特集した¹²⁾。

このように世界各国が生誕500年記念を祝わった1977・78年において、ソヴェトの研究はどのような対応を示したであろうか。「偉大なヒューマニストでユートピア社会主義者トマス・モアの生涯と作品は、ずっと以前からソ同盟においても外国においても大きな関心を喚び起こしてきた。ソヴェト社会主義共和国連邦においてだけでも、著名なモアの『ユートウピア』は6版を重ね、その印刷部数は約40万部に達した」¹³⁾と、現代ソヴェトを代表する研究者オシノフスキーが指摘していることから、当然その具体的な反応が予想される。

1977年にオシノフスキーは「現代のブルジョア歴史記述におけるトマス・モアの遺産の研究について」という論文を発表しているが¹⁴⁾、これはとくに生誕500年記念を意識したものではない。というのは、ソヴェトでは、モアの生誕について1478年説をとっているからであり、彼自身、翌1978年に出版された『ユートウピア』の序論として書いた「トマス・モアと彼の『ユートウピア』」において、「最近の研究者は、1477年2月6日と1478年2月7日をトマス・モアの2つの可能な誕生の日付けとしているが、大多数は後者の日付けに傾いている」¹⁵⁾と主張している。そして、その訳者カガンの論文「トマス・モアの『ユートウピア』のロシア語訳について」では、「1978年2月は、偉大なイギリスのヒューマニスト、トマス・モアの生誕から500年になる」¹⁶⁾と断定している。彼の『ユートウピア』の新訳は生誕500年を記念に出版されたものである。

さて生誕500年を記念するソヴェトの行事は、まず1978年3月21日、ソヴェト科学アカデミー主催のもとに、レニングラードで記念のコンファレンスが行なわれ、ついで5月29日には、同じく科学アカデミーの主催でモスクワにおいて記念会議が開催された¹⁷⁾。そこでの報告は、のちにみるように、「『ユートウピア』の著者の500年を記念して」出版されるが、その編者ルーチェンブルクによれば、「ソヴェト歴史学は、

トマス・モアの諸著作、活動および社会主義の学説と世界文化の歴史におけるモアの役割の全面的、客観的研究できわだっている。モスクワとレニングラードの記念会議で発表された報告を編集したのが、この論文集である」¹⁹⁾と説明している。この論文集の出版は1981年になるので、まず1978年の記念出版からみていこう。

1978年には、記念出版としてカレーヴァの論文「革命以前のフランスにおけるモアの『ユートウピア』」¹⁹⁾などもあるが、単行本は、まず『ユートウピア』の新しい訳が、カガンの手でラテン語から行なわれ、カガンとオシノフスキーの評註、およびオシノフスキーの「トマス・モアと彼の『ユートウピア』」を付して刊行された²⁰⁾。訳者によれば「有名なモアの著書『ユートウピア』は、何回かロシア語に翻訳されてきた。最初の翻訳は18世紀末に現われ、最後のものは1978年に現われた」²¹⁾のである。

続いてオシノフスキーが、これまでの研究を集大成した『トマス・モア——ユートピア共産主義、ヒューマニズム、宗教改革——』²²⁾を、この年に記念出版する。ここでもヒューマニズムを「ブルジョアの啓蒙の最初の形態」²³⁾とするエンゲルスの規定から出発するが、欧米の研究成果を十分摂取した展開が行なわれている。「20世紀イギリスの歴史記述におけるトマス・モア」²⁴⁾(1962年)や「トマス・モアの『ユートウピア』とその批評家たち」²⁵⁾(1968年)の論文で欧米の研究に対する幅広い考慮を示し、『モレアーナ』へ寄稿した「ロシアにおけるトマス・モアの『ユートウピア』」²⁶⁾(1969年)と「ソ同盟におけるモアの著作の稀覯本」²⁷⁾(1970年)にみられる書誌的研究の成果は、前著『トマス・モア』²⁸⁾(1974年)の最終章「結びにかえて」に総括されているが、それは新著の第1章「史料と史料編纂」に継承されている。モアの誕生日について「少なくとも作業仮説としては1478年2月7日を採用する」²⁹⁾ことから出発する。第2章「ヒューマニズム探求から共産主義的『ユートウピア』へ」では、これまでに発表した論文「トマス・モアの『リチャード3世史』の政治的傾向」³⁰⁾(1971年)、「トマス・モアの生涯と作品」³¹⁾(1973年)、「トマス・モアの『リチャード3世史』」³²⁾(1974, 76年)の成果が整理され、第3章「ユートウピア」には、1965年の論文「トマス・モアの『ユートウピア』の論述における1つの傾向」³³⁾が生かされ、第4章「ルターとの論争」、第5章「イギリス宗教改革者との論争」では、「トマス・モアとヘンリ8世の宗教改革」³⁴⁾(1960年)や「トマス・モア——ヒューマニストにして政治家——」³⁵⁾(1973年)の分析が利用されている。こうして彼が『ソヴェト歴史百科辞典』の〈トマス・モア〉の項目で簡潔に性格づけた「ヒューマニスト、ユートピア社会主義者、政治家」³⁶⁾モアという多面的な姿の全容が描き出されることになる。

これは4分の1世紀前にモアの生誕475年を記念して『ニュース』誌に寄稿した「サー・トマス・モア」で、戦前からの代表的なモア研究者ヴォルギンが、対象を『ユートウピア』だけに限定し、「彼はユートピア社会主義の父であり、その最大の代表者

の1人と認められなければならない」³⁷⁾と主張したモア像と比較すると、大きな発展である。そしてこうした多面的なモア研究という最近の研究動向は、「トマス・モアの思想的遺産と世界文化史におけるその意義の研究」を意図し、「生誕500年から準備された論文集」³⁸⁾として1981年に出版された『トマス・モア1478—1978——共産主義的理想と文化史——』³⁹⁾にも示されている。編者ルーチェンブルクの「トマス・モア——思想家そしてルネサンス的人間」からはじまり、オシノフスキー「ルネサンス・ヒューマニズムの歴史におけるトマス・モア」、サプレイキン「15世紀から16世紀初頭のイギリス政治思想におけるヒューマニズム的個人主義について」、ダロフェーエヴァ「トマス・モアとジョン・スケルトン」、カレーヴァ「フランソワ・ラブレとトマス・モア、小説『ガルガンチュアとパンタグリユエル』におけるヒューマニズムのユートピア」、コマローヴァ「シェイクスピアとトマス・モア」、カレーフ「『ニュー・アトランティス』と『ユートピア』」、モルドヴィンチェフ「ヴァスコ・デ・キローガとトマス・モアの『ユートピア』」、ブラーフスキ「スペインにおけるトマス・モア」、チコリーニ「16—17世紀初頭のイタリアにおけるモアの『ユートピア』」、クチェレンコ「17世紀フランスにおける『ユートピア』」、ヴァッリチ「トマス・モア『ユートピア』の初期のロシア語訳の歴史に」、シチェクリ「社会主義の歴史における『ユートピア』の位置をめぐる論争に寄せて」という記念祭における報告を中心として、モアからドルブ宛ての1515年10月21日づけの手紙(カガンの序文と訳)とアンデェルソン「19世紀初頭のオウエン主義出版物に現われた『ユートピア』」を資料として付けている。

1918年、レーニンの提案で、クレムリンの城壁ぞいのアレクサンドロフスキー公園に建てられたオベリスクに、マルクス・エンゲルスの名前と並んで、ユートピア社会主義者トマス・モアの名前が真中に刻まれ⁴⁰⁾、モアを「ユートピア社会主義の父」とするカウツキーの古典的研究『トマス・モアと彼のユートピア』のロシア語訳⁴¹⁾をその数年後に出版したソヴェトの伝統のなかで、生誕500年記念をめぐる最近の研究は、ヒューマニズムを強調しつつ多彩なモアの全体像への接近を行なうものとして、研究史のうえで新しい段階にはいったものといえるであろう。

- 1) Marc'hadour, G.: 'Thomas More's birth, 1477? or 1478?' *Moreana*, Vol. XIII, No. 53, 1977. p. 6. この論文は、日本トマス・モア協会の機関誌『トマス・モア研究』第8号、1977年に転載・訳出されている。
- 2) *Moreana*, Vol. XIII, No. 53, 1977. p. 33. 以下の各国における行事については、*Moreana* の No. 54, 55—56, 59—60, 62, 63, 65—66. および『トマス・モア研究』第8, 9・10号参照。
- 3) *Thought, Fordham University Quarterly*. Vol. LII, No. 206, 1977. «St. Thomas More Quincentennial Issue».

- 4) この国際会議の報告・行事については、『トマス・モア研究』第8号、報告の要旨については *Moreana*, No. 58. を参照。
- 5) このモア展とその出版物 Trapp, J. B. and H. S. Herbrüggen: 'The King's Good Servant' Sir Thomas More 1477/8—1535, 1978. については、田村秀夫「トマス・モア生誕500年記念」『学燈』Vol. 75, No. 6, 1978. 参照。このモア展と関連する出版物には、ほかにつぎの2点がある。Cox, A.: Sir Thomas More, 1977; McConia, J.: Thomas More, 1977. なお、モア生誕500年を記念する出版物のなかで、もっとも注目すべきものは、過去80年間に出版された重要論文を中心に約50篇の論文を集めたものがアメリカで出版された。Marc'hadour, G. and R. Sylvester (eds.): Essential Articles for the Study of Thomas More, 1977.
- 6) この国際会議のプログラムは『トマス・モア研究』第9・10号、参照。
- 7) ケンブリッジでの講演 Porter, H. C.: Erasmus and Cambridge; Elton, G. R.: More as anti-Utopian; Hurstfield, J.: More as Utopian. は『トマス・モア研究』第8号に収録され、ブリュージュにおける Marc'hadour, G.: Thomas More and Bruges. も第9・10号に訳出されている。
- 8) Milward, P.: 'More Pilgrimage from Japan' *Moreana*, Vol. XV, No. 50—60, 1978. p. 99.
- 9) 沢田昭夫・田村秀夫・P・ミルワード編『トマス・モアとその時代』研究社, 1978.
- 10) 日本イギリス哲学会監修〈イギリス思想研究叢書〉I, 田村秀夫編『トマス・モア研究』御茶の水書房, 1978; 塚田富治『トマス・モアの政治思想』木鐸社, 1978; 田村秀夫『ユートピアの成立—トマス・モアの時代』中央大学出版部, 1978; 田村秀夫『増補イギリス・ユートウピアの原型』中央大学出版部, 1978; 沢田昭夫訳『ユートウピア』中公文庫, 1978. その他の論文などの文献については、『トマス・モア研究』第9・10号, pp. 62—66. 参照。なおその編者沢田昭夫教授には邦語文献を網羅した書誌的研究「日本におけるトマス・モア研究」(1), (2). *NANZAN REVIEW*, No. 6, 7, 1970, 1971. があり、田村秀夫編『トマス・モア研究』の包括的な文献目録のうち VII Japanese Works. は、この優れた研究成果を継承・発展させたものである。
- 11) このシンポジウムの全容は、『社会思想史研究』第2号、ミネルヴァ書房, 1978. に収録されている。
- 12) 同上, 第1号, 1977. 沢田昭夫「戦後の欧米におけるモア研究」; 田村秀夫「ソヴェトにおけるトマス・モア研究」; 伊達功「日本におけるモア研究」を掲載している。
- 13) Осиновский, И. Н.: Томас Мор—гуманист и политик. "Новая и новейшая история", № 2, 1973. стр. 115.
- 14) Осиновский, И. Н.: Об изучении наследия Томаса Мора в современной буржуазной историографии. В кн.: История социалистических учений, Проблемы историографии. "Наука", М. 1977. стр. 142—165.
- 15) Осиновский, И. Н.: Томас Мор и его «Утопия». В кн.: Утопия. Перевод с латинского Ю. М. Каган. "Наука", М. 1978. стр. 7.

- 16) Каган, Ю. М.: О переводе на русский язык «Утопии» Томаса Мора. Тетради переводчика. Вып. 16, 1979. стр. 30.
- 17) Рутенбург, В. И.: Томас Мор—мыслитель и человек Возрождения. В кн.: Томас Мор 1478—1978, 1981, стр. 5. выноска 4. なお2つの会議のうち、モスクワのものについては、下記の紹介記事がある。Стам, С. М. и Яброва, М. М.: Конференция, посвященная Томасу Морю. В кн.: Средневековый город. Межвузовский научный сборник, вып. 5. Изд-во Саратов. ун-та, 1978, стр. 189—192.
- 18) Там же. стр. 5.
- 19) Карева, В. В.: «Утопия» Мора в предреволюционной Франции. Новая и новейшая история. вып. 3, 1978, стр. 70—78.
- 20) Томас Мор: Утопия. Перевод с латинского Ю. М. Каган, Комментарий Ю. М. Каган и И. Н. Осиновского, Вступительная статья И. Н. Осиновского. “Наука”, М. 1978.
- 21) Каган, Ю. М.: Там же. стр. 30. 最初は英語版からのルッソーの仏訳の重訳が1789年と1790年に出版され、ラテン語原典からの翻訳は1901年にタルレにより、1903年にゲンケリにより行なわれた。ソ同盟になってからは、ゲンケリの訳が1918年にペトログラードで、また1923年にはハリコフで出版された。ついでマレインの訳が1935年と1947年に科学アカデミーから出版され、ペトロフスキーの改訂版が1953年にモスクワで出版された。最後のものは1971年に《世界文学叢書シリーズ》の一冊として公刊されている。
- 22) Осиновский, И. Н.: Томас Мор, утопический коммунизм, гуманизм, реформация. “Наука”, М. 1978.
- 23) Там же, стр. 3. Маркс К. и Энгельс Ф. Соч., т. 22, стр. 21.
- 24) Осиновский, И. Н.: Томас Мор в английской историографии XXв. “Средние века”, вып. 21, М. 1962, Изд. АН СССР, стр. 262—274.
- 25) Осиновский, И. Н.: “Утопия” Томаса Мора и её критики. Вопросы истории, № 7, 1968. стр. 67—84.
- 26) Ossinovsky, I.: Thomas More's Utopia in Russia. *Moreana*, No. 22, 1969. pp. 33—38.
- 27) Ossinovsky, I.: Rare Editions of More's Works in the USSR. *Moreana*, No. 25, 1970. pp. 67—74.
- 28) Осиновский, И. Н.: Томас Мор. “Наука”, М. 1974.
- 29) Осиновский, И. Н.: Томас Мор. 1978. стр. 56.
- 30) Осиновский, И. Н.: Политическая тенденция “Истории Ричарда III” Томаса Мора. В кн.: Европа в средние века: экономике, политика, культура. Изд. “Наука”, М. 1971. стр. 407—420.
- 31) Осиновский, И. Н.: Жизнь и творчество Томаса Мора. В кн.: Томас Мор, Эпиграммы, История Ричарда III. “Наука”, М. 1973. стр. 149—191.
- 32) Осиновский, И. Н.: “История Ричарда III” Томаса Мора, ч. I, II, III, В кн.: Англия XIV—XVII вв. Проблемы генезиса капитализма.

- Сборник статей. Горький 1974. стр. 3—17; Вып. 2, 1974. стр. 61—64; Вып. 3, 1976. стр. 3—8.
- 33) Осинковский, И. Н.: Об одной тенденции в трактовке “Утопии” Томаса Мора. “Средние века”, Вып. 28, “Наука”, М. 1965. стр. 294—300.
 - 34) Осинковский, И. Н.: Томас Мор и реформация Генриха VIII. В кн.: Очерки социально-экономической и политической истории Англии и Франции XIII—XVIII вв. МГПИ ИМ В. И. Ленина, М. 1960. стр. 79—95.
 - 35) Осинковский, И. Н.: Томас Мор—гуманист и политик. “Новая и новейшая история”. № 2—3, 1973. стр. 115—127, 107—121.
 - 36) Осинковский, И. Н.: Мор, Томас. Советская историческая энциклопедия, т. 9, М. 1966. стр. 677.
 - 37) Valgin, V.: Sir Thomas More. *News, A Review of World Events*. No. 4, February 1953. p. 15.
 - 38) 出版社《ナウーカ》がカヴァーに印刷した内容紹介文。
 - 39) Рутенбург, В. И. (ред.): Томас Мор 1478—1978, коммунистические идеалы и история культуры, “Наука”, М. 1981.
 - 40) Осинковский, И. Н.: Томас Мор—гуманист и политик. “Новая и новейшая история”. № 3, 1973. стр. 121.
 - 41) Каутский, К.: Томас Мор и его утопия. пер. с нем., М. 1924.
- [付記] 本稿で利用したロシア語文献・資料の多くは、ソヴェト科学アカデミーのオシノフスキー研究員から提供されたものである。付記して謝意を表したい。
- [追記] 本稿執筆後に入手した資料も加えて一層包括的なソヴェトのモア研究を扱った「ソヴェトにおける最近のトマス・モア研究の動向」（『経済学論纂』〔中央大学〕23巻3号, 1982年5月, 所収）がすでに出版されているので、本稿を補完するものとして参照されたい。なお、注⑧の邦訳が И. Н. Оси́новский・小山内道子訳『トマス・モア』御茶の水書房, 1981. として本稿執筆後に刊行された。